

## オタクの迷い道

—— 世界 11 カ国調査の軌跡 ——

薄葉 彬 貢

青川：ということで、「オタクの迷い道」と題した薄葉さんの調査旅行の過程を対談形式で綴っていくことになりました。聞き手は慶應アニメーション研究会の元後輩の青川円です。それでは最初の質問なのですが、題した「オタクの迷い道」とはなんなのでしょう？ 11 カ国を調べたとのことですが、どこの国に行かれたのですか？

薄葉：師匠に当たる増田さんが付けてくれたのですが、多分オタクとして生きてきて、迷いに迷って今に至る事に囚んだのではないかと。確かにまともな人生を送ってきているわけではないので、個人的には正鵠を射ている題名ではないかと思っています。

青川：そうですね、ご自身がよろしければあえて追求はしませんが、11 カ国を回ったとのことですが、結構回ったというイメージがありますが、具体的には？

薄葉：順に挙げていくと、オーストラリア・ブラジル・ドバイ・トルコ・ギリシャ・アメリカ・スウェーデン・フランス・スペイン・イタリア・ハンガリーですね。ただ、旅の途中で出会ったバックパッカーは、100 カ国とか訪れている人もいたから、彼らから見たら大した数ではないでしょうけどね。

青川：まあバックパッカーとは旅の目的が違いますから、比較はしづらいとは思いますが、回る人は廻っているのですね。で、今回行った調査を全体的に見ると如何でしたか？

薄葉：調査は前半と後半に分けることが出来るのですが、後半の方は比較的効率よく調べることが出来たと思います。対して前半の方はかなり無駄が多かったかなと思います。

青川：前半というと、オーストラリアから第1回目のスウェーデン訪問ですね。

薄葉：そうです。それと、この対談は内容を前半の発展途上編と後半のアンケート調査編の二つに分けて話して行きたいと思います。前半の方は、比較的当時の調

査を振り返り反省するという趣が強い内容になるかもしれませんが、青川くんには少々聞き手として付き合っていたいただきたいと思います。

青川：こちらこそよろしくお願ひ致します。それでは、最初はオーストラリアですが、まず訪れた経緯を伺ってもよろしいでしょうか。

## 1. オーストラリア編

薄葉：旅の発端は、アニメ制作会社マッドハウスの広報をやっていたという友人から見せてもらったデータでした。「パブリカ」という劇場アニメ作品を世界 56 カ国に売ったというデータだったのですが、記載されていた内容が販売先の国と販売メディアのみで、当時まだ無知だった自分は、これだけか、とつい思ってしまったのです。そこで、海外のアニメファンってどうやってアニメを見ているのだろう、という疑問が浮かび、実際に海外を回って調べてみることにしたのです。

最初にオーストラリアを選んだ理由は、まず「パブリカ」が売られていたことから、多分アニメが消費されているであろうという予測と、英語圏であり更に時差もなく、加えて友人が住んで案内役を受けてくれたというのが主な理由です。後、日本貿易振興機構の JETRO がコンテンツ市場レポートを出していなかったというのもあります。既に調べてあるところを調べても二番煎じにしかありませんし。そんな理由です。

青川：意外と単純な理由ですね。それでオーストラリアのアニメ事情は如何でしたか？

薄葉：印象から言えば、色々と有りましたが、やはり海賊版の存在が印象的でした。

オーストラリアのメルボルンのコミックショップを 5 店ほど回ったのですが、うち 2 店が海賊版の店でした。海賊版の存在を目の当たりにしたのが初めてだったものですから、衝撃をうけましたね。

青川：ちなみに海賊版にどのような形で衝撃を受けたのですか？

薄葉：一つは売られているタイトル数でした。2 店の正規のコミックショップで売られているアニメタイトルよりも多かった事なのです。二つめは海賊版の品質が微妙に高い事でした。これもまた下手な正規版よりもパッケージがプラスチックのカバーで覆われていたりして、凝っていて、しかも値段が安い。13 話入って 10 豪ドルでしたし。コミックショップの店員が、海賊版のせいで正規版 DVD が売

れなくなった、と語っていましたが、それも合点が行きました。三つめは商魂の逞しさでしょうか。1店ではレンタル業も営んでいたのです。しかも海賊版のDVDを貸ししているのかと思いきや、ただのDVD-Rにネットからダウンロードしたデータを焼いたモノをレンタルしていたのです。店員曰く、ネットのおかげで海賊版すらも売れなくなってきた事への対処だと語っていました。オーストラリア国民の全員がブロードバンドに加入しているわけではないため、その人達をターゲットに商売をしていると言っていました。値段は4泊5日で4豪ドル固定。1作品が毎月放送する話数をまとめて1枚のDVDに入れているため、正規版は当然の事、香港等から来る海賊版よりも更に即時性が高いためか、利用者がいたことに驚きました。平日の昼間に訪れたにも関わらず、話している最中に4~5人が借りていきましたから。

青川：ちなみに、調べ方というのはどういう方法を取られたのですか？

薄葉：ボイスレコーダーを胸ポケットに入れて、店で売られているDVDタイトルを全て吹き込んで後で声起をしていました。他には客層とか、店舗の広さ、売られている品目など。後は店員に対してのインタビューです。

青川：ボイスレコーダーとは、傍から見ればよく分からない日本語で独り言をつぶやく変な日本人として映っていたのでしょうか、何故またボイスレコーダーを？

薄葉：最初は手書きで記入していたのですが、2店連続で、途中で店を追い出されてしまったのです。海賊版と普通のコミックショップだったのですが、やはり商品の品目を書くというのがお気に召さなかったようで。中国人が営んでいた海賊店でメモを取っていたときは、用心棒らしき人間が来て追い出されましたし、コミックショップの方では、「別な店のスパイか」という疑いをかけられ追い出されました。それで、メモ取りではダメかと思い、他の方法を模索したら、カバンの奥からボイスレコーダーとピンマイクが出てきて、試しに使ってみたところ秘匿性も高かったので、使ったということです。メルボルン最大のコミックショップでは二日間居座って一向にDVDのタイトルと裏に記されている企業名を吹き込んでいたのですが、特に何も言われませんでしたし。

青川：それとインタビューというのはどういうことを聞かれたのですか？

薄葉：オーストラリアの人たちってアニメとか漫画を買っていますか？という事くらいしか聞けませんでした。返答はどこも同じで、白人よりもアジア人が買っているとのことでした。

青川：ということは、やはりオーストラリアでは実りが少なかったということですか？

薄葉：残念ながら最初の一步、というくらいの価値しか有りませんでしたから、実りは少なかったですね。現地のオタク事情に精通した人ともアニメファンとも交流はしませんでしたし、10日間もいて一体何をやっていたんだろう、という気はします。

青川：最後に、他に苦労なさったことや気づいた点等がありましたか？

薄葉：苦労した事は二つあります。一つはメルボルンに向かう途中でブリスベンという都市の国際空港で乗換をする必要があったのですが、国際空港と国内空港が離れているという構図を知らなくて、焦ったことです。結局英語も余りできなかったので、国際電話で HIS に問い合わせた結果、離陸 10 分前くらいに乗れて事無きを得ました。もう一つは、乗換の時に時間が切羽詰っていたためか、手続に不備があり荷物がメルボルンに着かなかったことでしょうか。現地についたときは呆然としてしまいました。ただその経験から、海外に行くときは必ず現地の空港の地図を見る癖と、荷物に行き先のシールを張る癖がつかまりました。おかげで今のところ乗換で焦ることも、荷物が届かないということもなくなりました。

気づいたこととしては、正規で出回っている DVD が売れていないことでしょうか。レコーダーに吹き込んでいる最中、値段も見ていたのですが、元値が 70 豪ドルと書かれていたのが、4 回値下がりして 13 豪ドルになっていたのです。売られている作品も 2006 年以降に放送されたアニメタイトルは「らき☆すた」という作品一本のみでした。本当に日本のアニメが人気なのかと、疑ってしまいました。

青川：ありがとうございます。では次に向かうのはブラジルのようなのですが、オーストラリアの反省が生かされたのですか？

薄葉：多少は生かされたのではないかと思います。事実、ブラジルでは怖くてトランクを持っていきませんでしたし。

青川：それでは続いてブラジルに付いて伺っていきたいと思います。それでは、ブラジルを選んだその理由に付いてお答え下さい。

## 2. ブラジル編

薄葉：ブラジルもある意味成り行きで決まったようなものでした。オーストラリアから帰って、当時の私は調査をやったぞ、という気になっていたのですが、やはり先程話したとおり実りがまったくない。次調べるときは何か発展させたいな、と思いながら学校でオーストラリアのみやげ話をしていると、日系ブラジル人の友人が、海外のアニメや漫画事情を調べているのだったら、サンパウロに翻訳業をしている友人がいるけれど、紹介しようか。と言われたのです。オタク事情に精通している人に会えるぞ、と最初は喜んでお願いしますと頼んだのですが、学校からの帰りの電車で、ブラジルは JETRO が既に調べていたことを思い出したのです。これは二番煎じになるなと思い、帰ったら断ろうとしたら、既に家の PC に CC 付きでサンパウロの翻訳家の岡さんという人に紹介がされていたのです。で、これはもう無碍に断ることが出来ないなと思い、ブラジルに行くことにしたのです。

青川：相変わらず適当な理由ですね。ブラジルは危険と良く耳にしますが、大丈夫でしたか？それと現地のアニメ事情は如何でしたか？

薄葉：幸いなことに、翻訳家の岡さんが色々アドバイスをしてくれたので、危険な目には会いませんでした。ただ、クルマに乗って膝に荷物を置こうとする度に叱られました。何でも、バイク泥棒に取られるとかで。しかも、安全ですよ、と確認したら、リオと比べたら市街地で銃撃戦がおきにくいから安全ですよ、と言われました。他には街中を歩くときでも荷物を背負うな、早足で歩け、カメラは持つな、夜は出歩くなと注文も多く、安全の基準が国によって全然違うことを思い知らされました。

アニメ事情に関しては、オーストラリアよりは格段に良かったです。ケーブルテレビで日本のアニメ専門チャンネル「アニマックス」が展開していましたし、テレビを付ければいつでもアニメを見ることが出来るという環境は整えられていました。

ただ、海賊版事情についても岡さんから教えてもらって調べてみたのですが、すごかったです。リベルダージという日本人街に海賊店があるということから回って見たのですが、海賊店が軒を連ねていました。また、日本人街と銘打っておきながら商売をしていたのは現地のブラジル人で、流石に中国の華僑ネッ

トワーク程の強みはなかったためか、売られている DVD の品質は、中国人が営んでいた海賊店よりは低いものでした。市販の DVD ケースに印刷した紙を入れてだけのモノが売られていました。ただ売り方が考えられていて、「ロボット」や「ファンタジー」等でジャンル分けがされていました。後にいろいろな国を回りましたが、明確にジャンル分けをして売っていた所は、ブラジルの海賊店のみでした。それと品揃えなのですが 2008 年当時放送していた作品まで合わせて 350 タイトル以上揃えていました。

対して正規で出回っているアニメの方は、まったく売られていませんでした。岡さんに連れていってもらった数件のコミックショップでは多くて 40 タイトルほどで古いものばかり。売り方も雑で、ただ棚に置いてあるだけでした。アルファベット順ですらありません。海賊版事情からアニメが人気である事は分かったのですが、正規では売れていないんだな、という印象を受けました。

青川：何とも切なくなりますね。そういえば、以前ブラジルは漫画がすごかったと話していましたが、どんな感じでしたすごかったのですか？

薄葉：単的に言って、売り方が面白かったのです。アメリカで漫画を売る場合、日本と同じページ数で 1 冊として売られているのが普通でしょう。しかしブラジルでは少々趣が異なり、日本で売られている漫画 1 冊を 2~3 冊に分冊して売っていたのです。薄くはなりますが、その分小学生のお小遣いでも変える 4~8 レアル、日本円にして 240~480 円に設定し、かつ毎月 1 冊ずつ出るようにしていました。岡さんの話では、ブラジル人はあまり裕福ではない上に、微妙に飽きやすい性格をしているそうなのです。1 ヶ月間が開くと購買意欲が一気に落ちてしまうとかで、現在の売り方になったそうです。ちなみに、一見一冊の値段としては安いように感じますが、1 巻分揃えると値段は日本の 2~3 倍程で、アメリカで売られている値段を余り変わりありません。うまいやり方を考えたなと思います。それと海賊店同様、漫画の売り方に関してはコミックショップも色々と考えていました。岡さんから紹介してもらった、日本人が営んでいるコミックショップでは、古本屋でよく見られる全巻セットの売り方をしていました。売るための努力って重要だなと思いました。

青川：しかし漫画が好きなのに飽き易いというのは少々致命的というか、同じ漫画好きとして許しておけない気がするのですが。

薄葉：まあ国民性や経済事情というのが変に反映された結果なのでしょう。私も好き

な作品だったら少しの間くらい我慢しろとは思いましたよ。岡さんも同じ考えで、イベント等で講演する際は毎回「漫画翻訳と出版は決して楽なものではない」と語っていると言っていましたよ。まあ今の子供達が10年後にどういうマンガファンになっているか期待しましょう。

青川：他にブラジルを歩いて気づいたことはありませんでしたか？

薄葉：気づいたことというと、コミックショップが店を構えている近辺はどこも安全な感じがしました。岡さんが仕事で一緒に歩けない日に、一人で散策して訪れた店では、店頭でカードゲームに興じている大人たちやそれを眺めている子供たちの姿があって、話しに聞く危険な感じはまったくありませんでした。考えて見ればコミックショップなんて生活に余裕が無いと行けないような店ですから、店が構えているということはその近辺は多少生活に余裕がある人たちの圏内なのでしょう。だから安全といえれば安全な気がしたのでしょう。それと、先程話した日本人が営んでいたコミックショップ。店長が結構細目で、消費者の統計を取られていて、主な客層は10～20代で、月のお小遣いは平均して50レアル。2008年当時のレートで言うと大体3000円前後と言っていました。ただ、滞在期間も短かった上に、行動範囲も狭かったのも、ここも余り調べられませんでした。

青川：なんでたった三日間した滞在しなかったのですか？それと行動範囲も狭いというのはどういうことですか？

薄葉：勢いでブラジルに行くのを決めたは良いものの、当時ブラジルが危険であることを知らなくて、チケット買う際に旅行会社の人から色々と言われて、3日になってしまったのです。私が怖気づいてしまったというのが一番の理由です。ただ、ブラジルの滞在時間よりも、移動時間の方が長かったのは失敗でした。行動範囲が狭かったというのは、岡さんがいないときは基本移動が徒歩だったからです。タクシーもバスも電車も日本人一人で極力乗るとホテルの人にも注意され、一先ず守った結果です。次に調べる国は、せめて安全な国に行こうと決めました。そういえば反省点を上げるとすると2点。一つは言語です。ブラジルはまったく英語が通じない国だったので、意思疎通もままなりません。二つめは現地のアニメファンとの交流が出来なかったことです。人づてではなく、直接聞きたかったのですが結局できず、悔しい思いをしました。

青川：しかしその反省からどういう経緯でドバイなんて国に行くことになったのです

か？

薄葉：それもまた勢いだったのです。

青川：薄葉さん本当に計画性がないですね。

### 3. ドバイ編

青川：で、ブラジルの次はドバイでしたね。そういえばドバイ・トルコ・ギリシャと三つの国をいっぺんに回られています、またどういう経緯で回るようになったのですか？

薄葉：ドバイを選んだのは、友人から中近東初の「キャラクタードバイ」というアニメ関連イベントが開かれるという情報を聞いたことが発端でした。結局2カ国ほど回って調べたことが売られているDVD情報と、現地のショップ事情とかそれだけで、消費者であるアニメファンが介在していなかったのです。しかも近頃は誰もDVDなんて買っていないのではないかという疑問が沸き、売られているものを調べるのは意味が無いと思えてきたのです。そして、やはりアニメファンと直接交流してどういう生活をしているのか知るべきなのではないか、という考えに転換していったのです。しかしこのままでは発展もないからどうしたものかと、パブリカのデータを見せてもらったマッドハウスの友人と一緒に食事をしていたら、ドバイのアニメイベントに関する情報を教えてもらい、しかも中近東初ということもあって、イベントだったらファンとの交流もできるだろうと、モノは試しに行ってみることにしたのです。トルコ・ギリシャを回ったのは、1回の渡航に付き1国ではあまりにも航空券代が馬鹿にならなかったもので、回るのだったら幾つかまとめてまわろうと思い、ドバイ付近でパブリカが売られている国を探したら、トルコとギリシャがあったというだけのことでした。

青川：しかしドバイというと、金融騒ぎで色々と影は薄くなりましたが、個人的にはいまだにお金持ちなイメージがあるのですが、実際のところドバイは如何でしたか？

薄葉：この国に行っていなかったら今の調査発展がなかったと思います。良くも悪くも、転換点だったと思います。

青川：良くも悪くもというのはどういう事ですか？

薄葉：良い点というのは、二つ有りました。一つはイベントに参加したとき、日本の企業も幾つか来ていたのですが、その中の一つ「ブシロード」というカードゲーム会社の木谷社長と出会った事です。日本人の学生が来るとは木谷さんも思っていなかったようで、「何しに来たの？」みたいな会話をしたのですが、その時に「いや、こんなことを調べていまして」とオーストラリアとブラジルで調べたことをまとめた出来損ないのデータを見せたのです。そしたら何故か興味を示してくれて、「今度アメリカ行くんだけど、一緒に行かない？お金は出すよ」と言ってきたのです。冗談かなと思って「はい」と返事はしたのですが、後で本当にアメリカのロサンゼルスに行くことになるとは思いませんでした。この出会いが後半調査への布石となったので、まあ転換点かなと。

良かった点の二つめは、イベントでアニメグッズが売れたということでしょうか。当初自分が確保していた資金は大学時代に貯めた100万円程だったのですが、やはり海外旅行というのは金がかかり、資金がすごい速さで目減りしていったのです。どうしたものかと思って、一先ず手持ちのアニメ関連グッズを持参して、宿泊費の足しにしようと思って売ってみたのです。そうしたら、すごい勢いで売れてしまって、「ゼロの使い魔 ルイズ写真集」という定価1500円程の本が9000円で売れたり、コミケットで配られている無料の紙袋とか有るじゃないですか、あれが1000円で売れたり、結局9万程稼いで、旅中の宿泊費の大半を賄うことが出来ました。

悪い点は、初めてまともに交流したのが、ドバイのアニメオタク達だったということです。

青川：でも薄葉さん、ドバイのアニメオタク達すごいって言っていましたよね？どこが悪いのですか？

薄葉：オタクとしてのレベルが高すぎたのです。会う人会う人普通に原画家やキャラクターデザイナー、果ては演出家のスタッフ情報にまで精通していましたから。はっきり言って日本のライトな層とは比べものにならないくらい深かったのです。で、問題は彼らが自分の中で海外オタクのスタンダードになってしまったのです。もう会話しすごい勢いで盛り上がったのですが、後々世界を回っても、ドバイの彼らほど購買力と知識を有している人間には会えませんでした。

青川：薄葉さんはたまに思い込んだら一直線なところがあるので、一度踏みとどまって冷静になることをオススメします。それで、イベントの方は結局どうだった

のですか？

薄葉：過疎っていました。第1回目ということもあるのですがそれにしても少ない。オフィシャルHPには数万来たと書かれていましたが、あれは3000人来たらいい方だったと思います。今は多少盛況になっているといいのですが、その分コアな人達しか集まらなかったというのはあったかもしれません。あと、イベントが開催するときにドバイの王族の方々の顔を見ることができたのは面白かったなど。

青川：ちなみにドバイのアニメ事情は如何でしたか？

薄葉：当時TVではアニメが放送されていませんでした。でも現地のアニメオタクはネットでアニメを見ていた上に、欲しいアニメグッズは海外通販を使って買っていたようで、あまり不満はないように感じました。どうしても欲しければ日本に来ているみたいですし。まあお金持ちだなと思いました。

それとコミックショップはなかったのですが、イベントで知り合った人からショッピングモールがその代わりをしていると教えてもらいました。一先ず確認に行ったら、DVDは数が少ないながらも置いていましたが、面白かったのが売られている漫画で、フランス語だったのです。

青川：なんで漫画がフランス語なんですか？

薄葉：これまた生活環境なのでしょうね。当時出会ったドバイのアニメオタク達の多くが20代中盤以降で、しかも親が金持ちなのか、フランスに別荘を持っていて、幼少期の頃は良く休みでフランスに行っていたそうなのです。で昔のフランスは普通にTVで日本のアニメが放送されていたから、他のモノとは次元の違う日本のアニメを食い入るように見ていたら、自然とフランス語が身につけてしまったというのです。ですから、イベントで出会ったオタク達は皆フランス語を話せました。多分そういう事情が影響しているのではないのでしょうか。詳細は不明ですが、何とも面白い国でした。

青川：ほかに何かお気づきのことはありますか？

薄葉：アニメ事情ではないのですが、交通の便がすこぶる悪い。タクシーの乗車拒否は当たり前だし、バス停で1時間バスが来ないかと待っていたら3台連続で来られたときはどうしようかと思いました。後、砂漠の国というイメージがあって乾燥しているかと思いきや、海岸沿いなので湿気がものすごかった。日本の方がマシと思えました。それくらいです。そういえば青川君が持っているお金

持ちというイメージ、あれは事実だと思いますよ。ショッピングモールでタクシーを待っていたら 30 分で 3 台フェラーリを見ましたし。金があるところはあるのでしょうね。

青川：わかりました。それで、次に向かわれたのはトルコですよ。如何でしたか？

#### 4. トルコ編

薄葉：ドバイとのギャップがすごかったです。まず驚いたことは、当時のトルコって Youtube とかのストリーミングサイトが見れなかったのです。なんでも、隣のギリシャがトルコ建国の父を侮辱する動画を流したとかで、遮断してしまっていました。しかもコミックショップが何も無い。ドバイみたくショッピングモールが代わりを勤めてくれるのかというところではなく、純粋に日本のアニメや漫画が一切売られていない国だったのです。アニメも放送されていませんでしたし。コミックショップがない国は他にもあるのだろうけれど、自分が回った限りではトルコしかなくて驚きました。ハンガリーにもあったのに。そういえばトルコではポケモンが打ち切りになって、アニメが全く放送されなくなっていました。

青川：ポケモンが打ち切りに会うんじゃないですか。子供向けのポケモンがどうすれば打ち切りになってしまったのですか？

薄葉：なんか、権利が分散してしまったからだと思います。おもちゃを販売する権利を持っている玩具会社と、ビデオを販売する権利を持った会社と、放送する権利を持った会社がバラバラで、それぞれ勝手に商売を始めてしまい、統制が取れなくなったそうです。例えばガンダムで、Z ガンダムの最初が放送されているときにいきなりプラモデルで Z ガンダムを販売してしまう感じです。最初はガンダム Mk-II だったでしょう？そこから徐々に TV の放送に合わせて玩具のバリエーションを増やしていくと思うのですが、トルコでは時系列を無視しておもちゃを売ってしまったのだそうです。ビデオも同じで、TV で放送するよりも先の話を買ってしまったそうなのです。であらゆる面でばらばらになってしまっていて、裁判起こしてトルコのポケモングッズ販売を取りやめさせたとか、なんとも良く解らない話です。

青川：ちなみにその話はどこで聞かれたのですか？

薄葉：放送権を持っていた三菱商事系列の D-rights というアニメの流通をやっている会社だったかの子会社で、Mermedia という会社に聞きに行きました。

青川：どういう繋がりでそこに聞きに行ったのですか？

薄葉：キャラクタードバイで出会った D-rights の人と話して、次はトルコに行くんですよと言ったら、うちの子会社がありますが、話を聞いてみますか？と言われ、是非にとお願いしたのです。

青川：変な勢いと行動力だけはあるのですね。それだけは脱帽します。ちなみに今その会社は何をやっているのですか？

薄葉：当時はビーダマンの放送準備をしていると言っていました。ポケモンの教訓から、玩具販売まで自社でやるようにしたとか。オスマントルコの衰退はあいうヤツらに原因があるという自虐ネタを話されていました。

青川：コミックショップがなかったり、アニメが放送されていなかったり、親日と聞きますが、意外ですね。

薄葉：親日というのは日本人が金をもっているからではないでしょうか。歩くたびに絨毯屋に連れ込まれ茶を奢られて、絨毯を買えと勧められました。学生だから金がないと言ったら、飲みかけのカップを下げられたのはいい思い出です。他には日本人が好きだから靴を磨かせてくれと言われて、靴を磨いてもらったら、終わり間に金払えと言われ、700円ほど取られました。あの時は悔しかった。街並みは綺麗だったのですが、どうも国民は豊かではない印象を受けました。

青川：そんな国にもアニメオタクは居たのですか？

薄葉：ファンは居ました。この国あたりから、在日本大使館を使うようになったのですが、大使館を通じて日本語学校を紹介されて、そこに行って交流しました。アニメ好きが高じて日本語を学ぶ奴はいるだろうという予想をしていたのですが、実際にいてよかったです。ただ、先程も言ったとおり制限が多い国な上に、ネット速度が異様なほどに遅いため、トルコのアニメファンは数人でグループを作り、一つのタイトルを分担作業で落として、DVDに焼いてまとめて配るという涙ぐましい努力をしていました。要はドバイと違って、持てる時間の全てをアニメに注ぎ込むということが出来ない状況でした。そのため、オタクというのではなく、あくまでアニメを楽しむというファン止まりではありました。国によって得られる情報に差があるのだと思いました。

青川：なんというか、話に微妙に陰がありますが、何かあったのですか？

薄葉：この国では色々とありました。独断と偏見で申し訳ないのですが、出会った国民が皆身勝手というか、自己主張しかしないというか。Mermedeia で聞いた、オスマントルコの衰退は今のトルコ国民にある、ということは事実だと思います。

最たる例なのですが、大使館に行ったときに、大学名は忘れたのですが、イスタンブルの大学生で日本のアニメに関するイベントを開きたいという子が相談に来たから、乗ってあげてくれないか、と言われたのです。通訳も付けてくれるというので、じゃあ話だけでも、と大学に行って話を聞いてみたら、いきなり自分がイベントを成功するイメージを語られて、その成功のために日本で有名なアニメ監督を呼べ、と言ってきたのです。何を言っているのかいきなり過ぎてよく分からなかったのですが、うちの OB でアニメ撮影演出家の武山さんが居たじゃないですか。彼だったら紹介できるかなと思い、旅費とか滞在費とかは出るの？と聞いてみたら、いや自腹でお願い、というのです。そのかわり非常に良いホテルを 3 割引で使わせてあげるといふ、何とも高飛車なことを行ってきて、それじゃ誰も来ないよ、と言うと、いいホテルを 3 割引で使える権利のどこが不満なんだと言ってくるのです。しかも企画の内容を確認しようとしたらこれから考えると言うのです。そんな危うい企画には協力できない、と言ったら、私が成功するイメージを持っているのだからこのイベントは間違いなく成功する、だから手伝え、というよく分からない持論を述べてきたのです。途中から通訳の人が私の代わりに議論に入り、イベントってそんな簡単にできるものじゃないし、来て欲しければそれなりの誠意を見せる必要がある、という事を話して説得を試みようとしたのですが、結局あなた達じゃ頼りにならないときって捨てられる形で話し合いが終わってしまったのです。帰りの途中で通訳の人が、トルコ人は皆ああいう傾向が強く、心に余裕があるときは、多めに見てあげられるけれども、心が荒んでいるときは殺したくなる、と語っていました。

他にはぼったくりバーの被害にあって、5000 円くらい取られましたし。私も道行く他人にほいほいと付いていくのも悪かったのですが、ビールを 12 杯くらい飲んでステーキを食べただけで 8 万請求されたのにはびっくりしました。財布を分けていたのが幸いしてか、100 トルコリラしかなかったもので、なんか別室に連れていかれる途中に、有り金の 100 リラを渡して急いで逃げました。

青川：薄葉さん何やっているんですか。知らない人について行ってはいけないって小学生で習うことじゃないですか。そんなことだからサークルを乗っ取られるんですよ。

薄葉：いや、ドバイで、現地のおタク達から晩飯をおごってもらったのです。それでつい、海外の人って優しいな思い、警戒心が緩んでしまったのです。でトルコでも道で出会って金もってないよと言ってもお茶おごってもらったし、その流れで酒飲みに行こうよと言われて、無碍に断るのも失礼かと思い、手持ちも少しあったので付いて行ってしまったのです。まあ有り金全部取られたわけでもなかったの、いい勉強になりました。ただ問題はぼったくりバーから宿への帰り道で、警察に捕導されてしまったのです。で、事の経緯を話してその店に行こうと言ってきて、私はもう早く帰りたいだったので、もういいからといったのですが、警察がいや行こうと強引にきた道の方に車を進めてしまったのです。でも店に行くまではタクシーに載っていたので、詳細な経路などわからず、行き方がわからないとしきりに説明したのですが、まあいいから行こうと言って聞かないのです。でも場所がわからないから着くはずもなく、警官がいい加減走りまわった挙句、どこかと聞いてきて、だからわからないと答えたら逆ギレされて怒鳴られました。

トルコが嫌になった瞬間ですね。それと、その事件のおかげで人間不信に陥ってしまったのです。トルコ滞在の最後の日に、日本語学校で出会ったファンたちから家に呼ばれてアニメの話をしようということになったのですが、人間不信が治らず、まずお酒を呑むことができませんでした。飲み物は全て水道水で、食べ物もすごい慎重に食べていました。トルコ式ラーメンというのをご馳走してもらったのですが、調理過程を全部見て、本当に大丈夫かどうか、最初に誰か食べた後に食べました。今考えると失礼なことをしたなと思います。後日メールでやり取りをして、日本の飴を送っておきました。

青川：薄葉さんもいろいろな経験を経てひとつ大人になってよかったですね。アニメ事情ではかに何か気づくことはありましたか？

薄葉：DVD が売られていなかったことですね。パブリカの頒布権が売られている国だったはずなのですが、そもそも DVD が売られていない。ビデオ CD の国だったというのは衝撃でした。DVD プレイヤーが普及していない国だったのは驚きました。

青川：発展途上国の第三世界じゃないですか。ちなみに海賊版とかは？

薄葉：一応売られていました。ブラジルほどではないにしろ、ショッピングモール全てが海賊店というところがあってそこで調べてみたのですが、アメリカの映画ばかりで、アニメはマイノリティでした。2008年前後のタイトルが30程でしかも買って見たら中には映像ファイルが入っているだけでした。パソコンで見ることが前提となっていたのです。

青川：しかし話を戻しますが、ぼったくりバーの被害にあったなんて初めて聞きましたよ。

薄葉：恥ずかしくて言えませんでしたからね。まあ旅の反省ということで、今回は話しましたが、やっぱりトルコでも大したことは調べられていませんでした。ただなによりも、日本のコンテンツが全く売られていない国だったとは想定外でした。飯はうまかったのですが、もう二度と行きたくはないなあ。

青川：トルコで人間不信になったあと向かったのはギリシャですよ。以前カードゲーム大国と聞きましたが。

## 5. ギリシャ編

薄葉：そうですね。ブラジルがアニメより漫画が普及していた国だとしたら、ギリシャはカードゲームが普及していました。

青川：どうでもいいことなのですが。人間不信はあとを引いたのですか？

薄葉：さすがに引きませんでした。まあ宿泊先が知り合いの日本人の家でしたし、意思疎通も普通にできたので安心して。ただ、警戒心は常に持つようになりました。

青川：良い心がけですね。薄葉さんはもう少し人を疑う癖を持ったほうがいいですよ。で、カードゲームとかそこら辺の事情はどうやって調べられたのですか？

薄葉：それは、現地のアニメファンとの交流で、です。宿泊先の知り合いの伝手で、日本語学校の先生を紹介してもらい、日本語学校に赴いてアニメファンを探しました。このギリシャで、アニメファンを探すならば語学教育機関、という構図が確立しましたね。国によって情熱の差はありましたけれど、で、現地の協力者を見つけて、コミックショップとか、カードゲームショップを回ったわけです。

青川：で、交流した限りでは現地のアニメファンは如何でしたか？

薄葉：あまり濃くはありませんでした。結構トルコもギリシャも共通して、受動的なのです。日本から来たといえば、何かおすすめのアニメありませんか？と聞いてくるのです。目を輝かせて質問してくるのは嬉しいのですが、自分で探さないのかなと思ってしまいました。そこがドバイとは違いましたね。ドバイでは、〇〇を知っているか、と挑んでくる形で質問をしてきて、of course 答えて持ちうるアニメ知識で語り合いました。なんというか、お互いアニメの価値観が確立しているのか、見る作品に迷いが無いのですよ。たとえつまらなくてもロボット物はすべて見るぜ、という人もいれば、良いアクションを見たいと言って松本憲生という日本でも有名な原画家を追いかけている人もいました。

ただ、トルコはオタク環境が他国と比べても圧倒的に貧弱であったことと、ギリシャでは交流した子たちは皆カードゲームの遊戯王から派生してアニメを好きになったという経緯を持っていたので、こういうモノなのかな、という気がしました。ドバイほどのアニメに対するストイックさはありませんでしたが、この時は多分生活環境が影響しているのだろうと思っていました。

青川：話を聞いた限りではやっぱりドバイの方がおかしかったのだと思いますよ。薄葉さんはオタクという存在に対して何か変に求めすぎている傾向があるので、その調子で行けば絶対に文化交流で軋轢を生み出しかねませんよ。まあそんなことを延々と語っても仕方ないので、話を戻しますが、ギリシャのアニメ事情は如何でしたか？

薄葉：ドバイで植え付けられたオタクに対するイメージがあまりにも強烈で、その後色々痛い目を見たよ。特に後で話すスウェーデンでは酷かったね。まあ、青川くんの言うとおりで。ちょっとオタクという存在に求めたものが多すぎました。

で、アニメ事情についてなのだけれど、ギリシャもTVでは全くアニメが放送していなかったのです。今回まわった3カ国のTVアニメ事情はまったく良くなかったですね。ここで海外ではネットでアニメを見ているのが普通なのだという確信を得ました。

アテネには2店コミックショップがあるのですが、両方共すでにアニメDVDの取り扱いを辞めてしまっていたのです。売れ残りはほとんどがワゴンに入っており、現在は漫画のみをアメリカから輸入していました。

青川：ギリシャ語の翻訳出版とかはなかったのですか？

薄葉：アニメはもう7年くらい前に撤退していました。漫画の方は2008年当時は頑張っていてNARUTOとか、無限の住人という作品の翻訳をやっていたようですが、やはりアメリカからの輸入に押され、2010年現在はギリシャの友人に確認したところ、刊行は止まっています。値段も高かったですからね。普通に漫画1冊10ユーロで売られていて、翻訳版も同値段で売られていたのです。まあ誰も買わなくなるなという気がします。

青川：他に気づいたこととかはありますか？

薄葉：そういえば、2店のコミックショップは同業種ではなく、一方はアメリカから英語版の漫画などを仕入れる店で、もう一方は日本からフィギュアやアニメ雑誌、アートブックなどを輸入して販売している店でした。アテネの市内及び近郊で、棲み分けが出来ている状況だからこそ細々とやって行っているのでしょう。しかし日本のコンテンツって思いのほか売られていませんでした。カードゲームショップはアテネ市内に17店舗あるとのことでしたが、この時は3店舗しか確認できませんでした。ただ、確かに遊戯王の世界チャンピオンを生んだギリシャらしく、どこの店でもカードゲーム勝負が行われていました。

青川：しかし日本のコンテンツってあまり売られていなかったのですね。

薄葉：それは国によりますね。あと個人の財力。ドバイみたく直輸入という力技で買っている人もいましたから。

青川：でもそれにしては商品知識がないんじゃないですか？「ルイズ写真集」なんて9000円も出す価値はないでしょう。

薄葉：そこは舌先の力ですよ。コミケ限定グッズとかを最初に微妙な値段で売りながら、実はこれ日本でもあんまり手に入らないんだけど、とって売りました。コミックショップも、商品情報も全くない状況下だったから、最初の1手としてはよかったと思いますよ。これが2回目3回目になると徐々に客側も知識が付いてきて無理だろうけれど。

でもアニメの主題歌CDとか限定DVDとかの知識は持っていたから、変なところで偏っていたというのも売り逃げする手段としてはよかったかもしれませんね。

青川：それって詐欺じゃないんですか？

薄葉：いやああの時は金もなかったもので、勘弁してください。ただ、輸送料込の値段

なのだろうけれども、ドバイで売った3分の1の値段で「ルイズ写真集」がギリシャで売られていたから、ギリシャで同じことをやっても駄目だっただろうね。

青川：後ろから刺されないように気をつけて生きてください。他に何かありますか？

薄葉：そういえばギリシャに滞在しているときに、ストに出会って、アテネ市内の店が全部しまって1日無駄にしたことがありました。後は日本への帰路の途中、一度ドバイに寄ったのですが、その時に5000分の1の確率で1億円が当たる宝くじがあったのです。事前に日本の友人と一緒に1枚ずつ買う約束をしており、1枚30000円と高めだったのですが、もしかしたらと思い買ってみました。当然ながら外れましたがね。

青川：そんなこんなで、日本に戻ってきたら、すぐにアメリカに行くことになったのでしたっけ？

薄葉：そうです。日本についてから三日後にロサンゼルスに木谷さんと一緒に行きました。

青川：しかし良くわからない人生ですね。そこで調査最大の山場を迎えるのでしたっけ？

薄葉：そうね。今まで漠然として世界を廻っていたものが、ロサンゼルスに行ったことで明確な指標を確立することができたからね。

青川：ちなみにどういう事で確立したのですか？

薄葉：木谷さんが昔社長をやっていたブロッコリーという今でもあるキャラクターマーチャンダイジングの会社があるのだけれども、そのブロッコリーがロサンゼルスに数年前に出した支店が潰れる事になった経緯と、アメリカにおけるアニメ市場衰退の歴史とその原因を聞いたことで、調査方法とか、指標を確立できたのです。

青川：そろそろ時間もなくなってきたので、そのおはなしは次回ということになりますね。

薄葉：そうですね。次回は発展途上編の後半と、アンケート編をまとめてお話することにしましょう。

青川：それでは、また次回をよろしくお願い致します。

薄葉：よろしくお願い致します。

**薄葉 彬貢（うすば あきたか）**

映画専門大学院大学助手。

1984年東京都生まれ、慶應義塾大学理工学部数理科学科卒、慶應義塾大学院メディアデザイン研究科修士2年。

2008年よりヨーロッパを中心に、世界11カ国を回り、出版社やメディア関連企業、コミックショップ等現地企業の取り組みについてインタビューを実施。現地アニメファンの消費行動についてもアンケート調査を行っている。現在、ヨーロッパのみならず、アメリカ・ブラジルの調査を計画中。